

多賀城市内の遺跡1

—平成17年度発掘調査報告書—

平成19年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市内の遺跡1

—平成17年度発掘調査報告書—

平成19年3月

多賀城市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成17年度の市単独事業で実施した8件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡及び山王遺跡第59次調査の調査区基準線については、X=189,200.000、Y=13,850.000（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに、東西方向は東にE1・E2…、西にW1・W2…、南北方向は北にN1・N2…、南にS1・S2…と表示している。
4. 採図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を使用した。
6. 本書の執筆は、I・II・III・V・IXを石川俊英、IV・VII・VIIIを村松稔、VIを千葉孝弥が行い、編集は石川俊英が担当した。また遺構・遺物の図版作成では廣瀬真理子・大友貴晴の協力を得、遺物の写真撮影は村松稔が担当した。
7. 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1	VI. 高崎遺跡第52次調査	25
II. 山王遺跡第55次調査	3	VII. 高崎遺跡第54次調査	30
III. 山王遺跡第56次調査	6	VIII. 小沢原遺跡第8次調査	32
IV. 山王遺跡第59次調査	9	IX. 西沢遺跡第12次調査	36
V. 市川橋遺跡第53次調査	23		

調査要項

- | | | |
|----------|--|-----------|
| 1. 調査主体 | 多賀城市教育委員会 | 教育長 菊地 昭吾 |
| 2. 調査担当 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター | 所長 佐藤 康輝 |
| 3. 調査協力者 | (地権者)片山寛之 阿部 均 林 謙二 小西桃悦
本郷石材工務店 高橋工業株式会社 発向工業株式会社 浜田工業株式会社
渡谷コンクリート工業 | |
| 4. 調査従事者 | 赤間かつ子 浅野喜久男 伊丹一欽 大場勝喜 小野玉乃 小幡 武 小松まり
今野和子 南城美岐子 藤田恵子 菊田百合子 斎藤金茂 清水 亮 松田正樹
若生美津枝 宮川ハルミ 平山節子 浜田優美子 渡辺ゆき子 | |
| 5. 整理従事者 | 遠藤友美 高木一枝 中村千恵子 松崎祥子 村上和恵 横山佳織 | |

凡　　例

1. 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
SB：建物 SI：竪穴住居 SD：溝 SK：土壙 Pit(P)：柱穴及び小穴 SX：道路、河川及びその他の遺構
2. 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(多賀城市教育委員会 2003) に従った
3. 瓦の分類は『多賀城跡 政府跡 図録編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、『多賀城跡 政府跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) に従った。
4. 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解と(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)、『扶桑略記』延喜15年(915)7月13日条にある「出羽國言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10°C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	備考
1	山王遺跡(第55次)	山王二区133-4	6/1～6/27	50m ²	石川・大友	本書に収録
2	山王遺跡(第56次)	山王字千刈田	9/20～10/12	28m ²	千葉・石川・大友	
3	山王遺跡(第59次)	市川字多賀前・山王字山王四区	1/10～1/31	203m ²	石川・島田・相澤・武田 鈴木・村松・廣瀬・大友	
4	市川橋遺跡(第53次)	城南二丁目20	8/29～9/12	29m ²	石川・大友	
5	高崎遺跡(第52次)	高崎二丁目地内	11/14～2/20	212m ²	千葉	
6	高崎遺跡(第54次)	高崎二丁目3-3	12/7～12/8	9m ²	村松	
7	小沢原遺跡(第8次)	浮島二丁目121-4	10/3～10/14	21m ²	村松・廣瀬	
8	西沢遺跡(第12次)	市川字奏社・伊保石	10/13～11/17	76m ²	千葉・石川・大友	
9	山王遺跡(第57次)	山王字三千刈・掃下し	10/3～10/18	30m ²	村松・廣瀬	市報告第81集 に収録
10	高崎遺跡(第48次)	留ヶ谷一丁目136-1	4/27	20m ²	千葉	
11	高崎遺跡(第49次)	高崎二丁目73-1、79-3	5/16～7/27	79m ²	千葉	市報告第82集 に収録
12	高崎遺跡(第53次)	留ヶ谷一丁目35	12/2～12/16	255m ²	島田	
13	高崎遺跡(第55次)	高崎二丁目9-3	3/13	2m ²	千葉	平成18年度 報告予定
14	東田中窪前遺跡(第3次)	東田中一丁目242-1	6/2～6/7	54m ²	千葉	溝跡発見
						市報告第82集 に収録

表 1 平成17年度市単独事業発掘調査一覧表

I. 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 市川橋遺跡

本遺跡は、本市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川の東側に形成された標高2～3mの微高地に立地し、特別史跡多賀城跡の南側及び西側に位置している。その範囲は、東西1.4km、南北1.6kmの広さを有する。

本遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関連した古代の遺跡として知られている。これまで実施された発掘調査において多くの貴重な成果が得られているが、最も注目されるのは多賀城南面に施行された古代の方格地割りの発見である。これは、南北大路、東西大路と呼んでいた二つの基幹道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方に区画され、まち並みが形成されたものである。このまち並みについては古代地方都市と位置づけられており、規則的に配置された大規模な建物群や井戸跡、河川やそれに架かる橋など多数の遺構が発見されている。

2. 山王遺跡

本遺跡は、本市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川と本市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川に挟まれた標高3～4mの微高地に立地している。その範囲は、東西約2km、南北約1kmの広さを有する。東は市川橋遺跡、西は新田遺跡と接し、大規模な遺跡群を形成している。

本遺跡は、弥生時代から近世にかけての複合遺跡として登録されており、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割り、大溝によって区画された中世の屋敷跡、近世の堀跡や井戸跡などが発見され、多くの成果を得ている。特に、古代の方格地割りは、東側に位置する市川橋遺跡にかけて広がっており、古代の地方都市のあり方を考える上で、注目される。近年の調査では、大路沿いには四面庇付建物や井戸を備えた国司館、大路より一区画離れた場所の中には中・下級官人の住まいや工房などが発見され、地割内で宅地の選定が行われたことが明らかになっている。

3. 高崎遺跡

本遺跡は、本市の東半部を占める標高30m以下の低丘陵の西端部に立地している。遺跡の中央部には多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡を取り囲むように、東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。この丘陵は、塙竈方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に派生している。このため、大小の谷が複雑に入り組んだ、起伏に富んだ地形を呈している。現在では多賀城廃寺周辺をのぞいて市街化が進み、多くは宅地となっている。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施されており、古墳時代から近世の遺構・遺物が発見されている。奈良・平安時代について見れば、第10・11次調査の成果が注目される。前者は廃寺跡の南西約200mの地点を調査した結果、約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡等を発見している。竪穴住居跡の中には工房跡と考えられるものや、灰釉陶器把手付瓶・小型の長頸瓶、鉄製匙等が一括出土したものがあり、さらに付近からは仏器である灰釉陶器の淨瓶も出土していることから、一般集落とは異なる性格であったと考えられている。後者では1,000個体を超える大量の灯明皿が一括廃棄されており、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられる。

4. 小沢原遺跡

本遺跡は、本市東側の標高8mの低丘陵の裾部に立地している。この低丘陵は、標高50~100mの塩竈丘陵から派生したもので、基盤は砂岩・凝灰岩である。この丘陵の裾部には大小の谷が複雑に入り組んだ地形になっており、その標高も暫時減じている。

本遺跡の年代については、これまで7次にわたる調査の結果、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土器埋設遺構等を発見しており、年代的にも平安時代を中心としていることから、多賀城に近接した集落跡と見ることができる。

5. 西沢遺跡

本遺跡は、多賀城市市川・浮島地区に所在し、東西約450m、南北約700mの広さを有する。地形的には松島丘陵から塩竈方面に向かって派生した低丘陵の南西端部に位置している。標高は北側の丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約5mであり、全体として斜面の合間に大小の谷が入りこんだ地形を呈している。

本遺跡の西側には、特別史跡多賀城跡が隣接し、東側には奈良・平安時代の散布地及び集落跡である法性院遺跡と高原遺跡が所在する。本遺跡についてはこれまで11次にわたる発掘調査を実施しており、繩文・古代～近世の遺構・遺物を発見している。特に平安時代においては、城内の大畠地区官衙とおおよそ同時期の鍛冶工房を含む竪穴住居や掘立柱建物が整備される傾向になり、多賀城と密接な関係にある地域として認識されている。なお、これまでのところ沖積地（湿地）においては、明確な遺構は発見されていない。



第1図 調査地の位置

II. 山王遺跡第55次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年4月に地権者より当街区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された建築計画では、基礎工法に直径50cm、長さ6.5mの鋼管杭を38本打ち込む地盤改良杭を施していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施されることが決定した。その後5月10日に地権者より発掘調査の依頼を受け、第55次調査の実施に至ったものである。調査は6月1日より開始し、重機を使用してI・II層（盛土・旧水田土）まで除去した。掘削土は調査対象地内の安全と調査面積確保のため、全て場外へ搬出した。翌日、作業員を動員して遺構検出作業に着手し、最初に土層観察と排水溝を兼ねた側溝を掘る。検出作業の結果溝を検出し、重複関係の有無を確認した後、順次埋土を掘り上げた。10日調査区の全景写真撮影後、遺構の平面・断面図を作成する。13日には下層遺構の有無を確認するために、調査区北・東壁に沿って試掘坑を設定した。その結果、遺構面となっていた土層は砂と粘質土が交互に堆積する河川の堆積土であり、年代も出土した遺物から古墳時代頃と見られた。23日からは土層の写真撮影と断面図の作成を行う。27日土層記録後、埋め戻し作業を行って、現地調査を終了した。

2. 調査成果

（1）層序

調査区内の層序は、おおよそ以下の6層に大別できる。

I層：現代の盛土。調査区全域を覆っている。厚さは約70cm前後である。

II層：旧水田耕作土。調査区全域を覆っている。厚さは約10～40cmである。

III層：調査区北半部に堆積する。灰色砂で、厚さは最大約35cmである。

IV層：調査区北半部に堆積する。黒褐色粘質土で、厚さは最大約20cmである。

V層：調査区北東部から北西部に堆積する。暗灰黄色粘質土で、厚さは最大約20cmである。

VI層：調査区北半部の中央に堆積する。暗緑灰色砂で、上面は遺構の検出面となっている。北・東壁際及び中央部を約1m掘り下げた結果、西側と東側へそれぞれ傾斜する堆積層を確認し、古墳時代の土器が出土したことから古墳時代頃の河川であると理解した。



第1図 調査区位置図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では溝跡4条とそれより古い河川跡を発見した。

SD 1137溝跡

調査区西半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。SD1138と重複しており、これより新しい。溝の両端は調査区外に延びて行くため、確認できた長さは約6.4mである。方向は、北で約9度東に偏している。規模は上幅43~63cm、下幅16~43cm、深さは12cmである。底面は平坦面を呈し、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は暗緑灰色砂質土の単層で、オリーブ黒色粘質土を斑状に含んでいる。遺物は土師器甕が出土している。

SD 1138溝跡

調査区北西半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。SD1137と重複しており、それよりも古い。溝は北側が調査区外に延び、南側はSD1138に壊されているため、確認できた長さは約2.3mである。溝の方向は、ほぼ発掘基準線に沿っている。規模は上幅54~62cm、下幅32~45cm、深さは10cmである。底面は起伏が認められるが概ね平坦であり、壁は西側が急に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に区分でき、いずれも暗緑灰色砂質土を主体としている。遺物は出土していない。

SD 1139溝跡

調査区北西隅のVI層上面で発見した北東から南西方向に斜行する溝跡である。SD1140と重複しており、それよりも新しい。確認できた長さは約1.7mである。溝の方向は、北で約41度東に偏している。規模は上幅59~72cm、下幅20~38cm、深さ18cmである。底面は起伏があり、壁は急に立ち上がる。埋土は暗緑灰砂質土の単層で、緑灰砂、オリーブ黒色粘質土を含んでいる。遺物は出土していない。

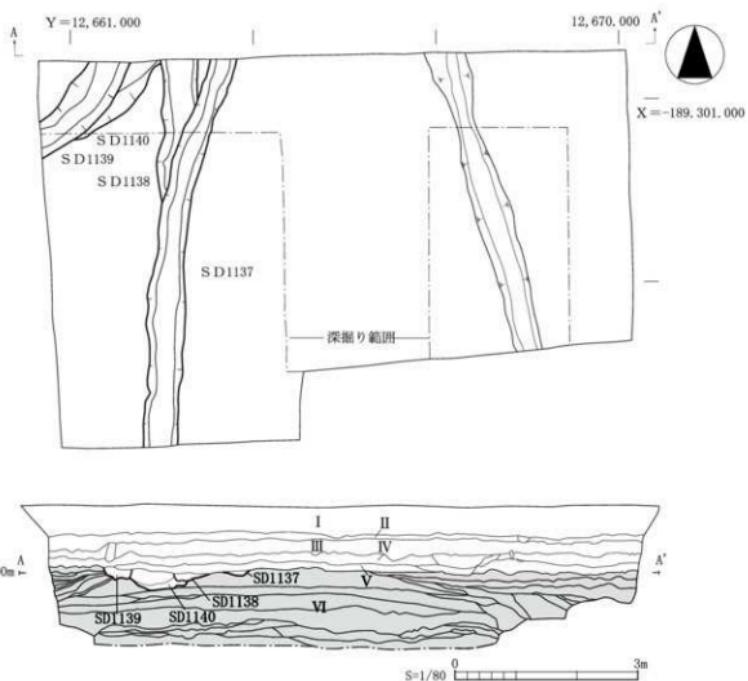
SD 1140溝跡

調査区北西隅のVI層上面で発見した北東から南西方向に斜行する溝跡である。SD1138・1139と重複してそれらよりも古いため、長さ・規模は不明である。底面は船底型を呈し、壁は急に立ち上がる。埋土は2層に区分され、いずれもオリーブ黒色粘質土に暗緑灰砂を含んでいる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯、土製模造品（丸玉）が出土している。

3.まとめ

(1) 今回の調査では、溝跡4条とそれより古い河川跡を発見した。

(2) 遺構の年代についてみると、SD 1137・1140は出土した遺物から概ね古代の範疇で捉えられるものである。SD1140より新しいSD1139、及びSD1137より古いSD1138については遺物は出土していないが、同様の年代を考えておきたい。



第2図 調査区平面図・北壁断面図

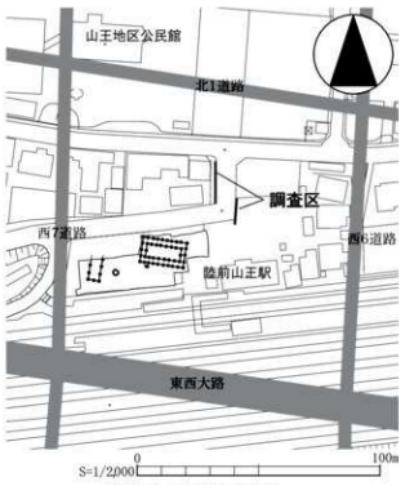


調査区全景（東より）

III. 山王遺跡第56次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王遺跡における公共下水道汚水管布設工事に伴う発掘調査である。平成17年6月21日下水道課より下水道汚水管敷設工事と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。この計画は径150mmの塙ビ管を布設するもので、幅10m、深さ約16mの敷設溝を市道山王高崎線内に全長約27mにわたって掘削するものであったが、対象区は狭隘であり、しかも周辺の交通量が多いことから、当初工事立会として実施したものである。しかし、当該区は「国守館」を発見した第9・18次調査区の北東に隣接する位置にあり、これに関わる遺構の存在が予想された。そのため、下水道課の協力を得て表土を除去した段階で遺構の検出作業を実施したところ、9月20日現地表面下約0.9mで遺構を発見し、事前調査に移行した。



第1図 調査区位置図

調査は工区内の掘削の工程に合わせて9月20・21日に第I工区、10月11・12日に第II工区を対象とし、のべ4日間実施した。第I工区からは柱穴や溝跡、第II工区からは大型の柱穴や土壙など検出し、写真撮影や平面・断面図を作成して調査を終了した。

2. 調査成果

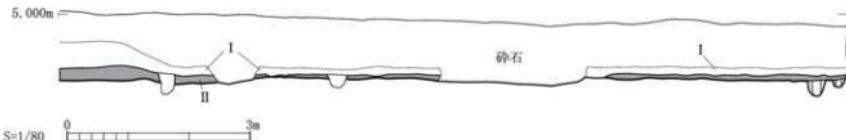
(1) 層序

道路面（アスファルト）下には、約50～110cmの厚さで碎石が敷き詰められていた。

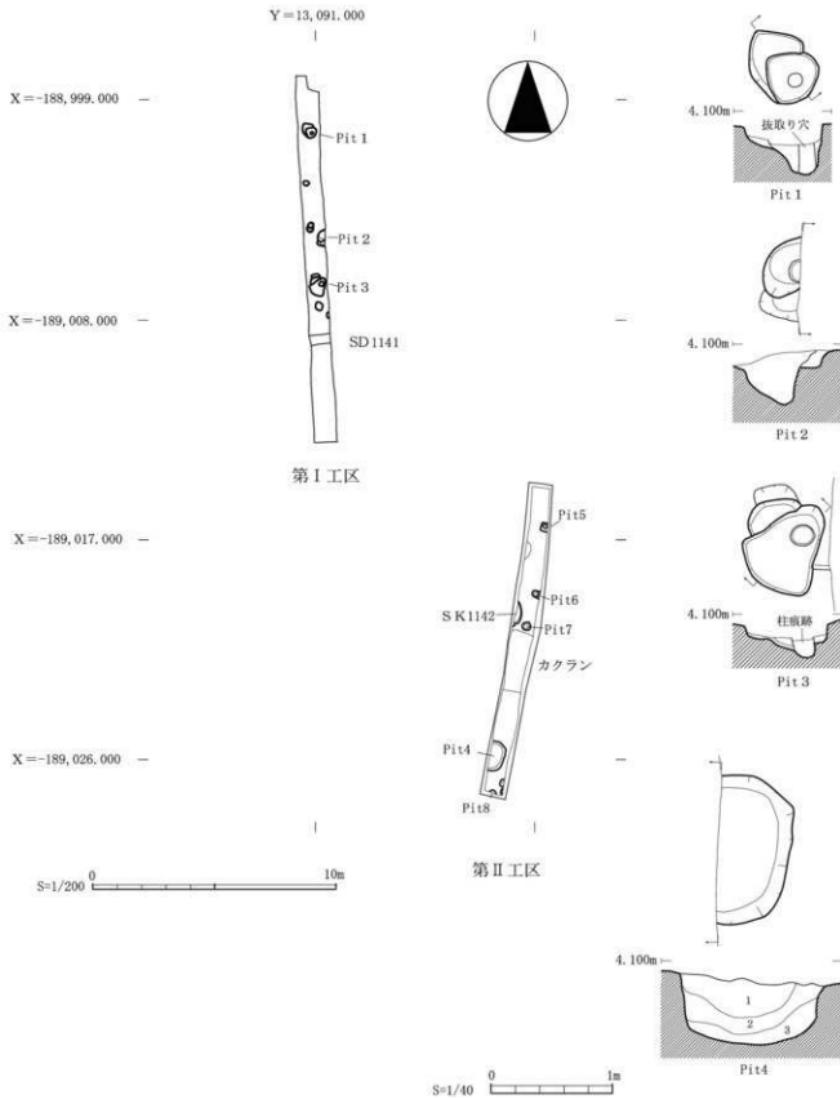
I層：厚さ10～40cm旧水田土、調査区のほぼ全域に堆積している。

II層：厚さ2～20cmの黄褐色砂質土で、Pit5・6の検出面となっている。

III層：地山面（最終遺構検出面）



第2図 第II工区東壁断面図



第3図 調査区全体図及び柱穴平面図・断面図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では溝跡1条、土壌1基と大型の柱穴1基を含む柱穴15基を発見した。

SD 1141溝跡

第I工区南半部の地山面で発見した。残存状況は悪く、かろうじて埋土の一部を確認したのみである。方向は、国土座標の方向におおよそ一致している。規模は幅約40cmである。

SK 1142土壌

第II工区西壁際の地山面で発見した。規模は南北1.05m以上、深さは22cmであり、壁は緩やかに立ち上がりっている。底面は平坦であるが、埋土は黒褐色土を斑点状に含んだ灰黄褐色質土である。遺物は土師器杯(BV類)・甕(B類)、須恵系土器杯が出土している。

その他の遺構(第3図)

15基の柱穴を発見した。掘立柱建物跡や柱列として組み合うものは確認できなかった。掘り方の平面形は方形もしくは円形である。Pit4は全体の様相は不明だが、規模は南北1.2m、東西60cm以上、深さは53cmの大型の柱穴である。柱痕跡は確認できなかった。埋土は3層に分けられ、上層(1~2層)は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土をわずかに含んだ、にぶい黄褐色土砂質土である。遺物は土師器杯(BII・BV類)・甕、須恵器杯(III・V類)、須恵系土器杯・高台付杯が出土している。この他のPitについては、東西28~60cm、南北26~95cm、深さは15~21cmである。埋土は、灰黄色褐色砂質土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土・にぶい黄褐色砂質土・黄褐色砂質土を含む黒色・黒褐色粘質土である。遺物はPit1から土師器杯(BI類)、Pit7から土師器杯、須恵系土器杯、Pit8からは須恵器長頸瓶が出土している。

3.まとめ

(1) 今回の調査では溝跡1条、土壌1基、柱穴15基を発見した。

(2) 発見した遺構の年代は、出土遺物からおおよそ9世紀から10世紀頃と見られる。

(3) 当該区は、「国守館」を発見した第9・18次調査区の東側に位置し、これらを区画する北1西7の敷地内に相当することから、今回発見された遺構は、国守館に関わる施設の一部と見られる。



第II工区北半部(北より)



第II工区南半部(南より)

IV. 山王遺跡第59次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、平成17年度の加瀬用排水路3号整備工事事業に伴うものである。平成17年11月14日に当市農政課より当該地における農業用排水路整備計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画は、素掘りの水路を改修し新たにU字溝を敷設する際に、幅3.8m、深さ1.5m、長さ82mに及ぶ掘削を行うものであった。当該地は、南2道路の推定線上にあり、古代都市に係わる遺構・遺物があることが予想された。したがって、これら埋蔵文化財への影響が懸念されたが、この計画は、周辺の農業基盤を整備するために必要不可欠なものであることから、申請された工法で実施することとなった。調査については、既存水路の改修で、掘削幅が狭小であることから、当初は工事立会として1月10日から開始したが、後述するように古代の遺構を多数発見したことから、本発掘調査を実施した。

工事立会は平成18年1月10日から行った。工事はU字溝を設置する北側の箇所と、水門を設置する南側の箇所の計2箇所からなっており、調査において前者を北区、後者を南区とした。北区から重機によつて順次掘削を行ったところ、南北方向に擾乱溝を検出しそれを掘り上げた。12日に素掘りの水路の底面に、柱穴や溝跡を発見したことから、本発掘調査に移行した。13日から遺構検出作業を行い、北区の中央にSD1268溝跡を発見し、複数の時期変遷があることから、道路跡の可能性が考えられた。19日に測量のための基準点を設置し、北から実測図の作成を開始する。30日に、断面観察の結果、当初南2道路と考えていたSD1268溝跡が、道路跡ではなく複数時期の変遷がある溝跡であることが判明した。また、南区で重機を用いて掘削したところ、古代の遺構は確認できなかつたが、さらに下層において古墳時代の水田層とみられる黒色粘土層を検出したことから、これらの実測図および写真撮影を行つた。31日に、一部実測図作成と写真撮影を行つた後、プラント・オバール分析をするための土壌サンプルを採取し、現地発掘調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序

今回の調査で発見した層序は以下の通りである。ただし、I～III層とIV層の一部については既存の水路

により壊されおり、断面でのみ確認した。

- I 層：現代の水田耕作土で、厚さは約50cmである。
- II 層：黒褐色土で、厚さは10～20cmである。II層とIII層に細分できII層には砂を多く含んでいる。
- III 層：暗オリーブ褐色土で、炭化物を含む。厚さは5～20cmで、古代の遺構検出面となっている。
- IV 層：黒褐色土で炭化物を少量含む。厚さは6～35cmで、古代の遺構検出面となっている。
- V 層：オリーブ黒色粘質土で、VI層に起因する土をブロック状に含む。厚さは8～20cmである。
- VI 層：灰白～暗オリーブ色土で、厚さは約40cmである。古代の最終遺構検出面となっている。
- VII₁層：黒色粘土層で、厚さは8～14cmである。
- VII₂層：黒色粘土層で、厚さは5～30cmである。
- VII₃層：南区のみで確認したオリーブ黒色粘質土で、砂を微量に含んでいる。
- VIII 層：緑灰色砂である。

(2) 発見した遺構・遺物

今回の調査では掘立柱建物跡、溝跡、土壤を発見した。これらは全て北区で発見した（註）。

SB 1301 掘立柱建物跡

調査区北半部で発見した南北2間、東西1間以上の建物跡である。SD1264・1265と重複しておりこれらより古い。Pit2・4で柱抜取り穴を確認した。方向は北で約3度東に偏しており、総長は3.6mで柱間は南より約1.7m、約1.9mである。掘り方の平面については、概ね方形で、規模は1辺30～40cmである。遺物は、柱抜取り穴から土師器甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕、須恵系土器杯が出土している。

SD 1264 溝跡

調査区北半部のIV層上面で発見した北西から南東方向に延びる溝である。SB1301及びSD1265と重複しておりこれらより新しい。規模は、長さ1m以上、上幅70cm、下幅44cm、深さ27cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。埋土は3層に区分できる。1層は炭化物を多量に含む黒色土、2層は炭化物の粒を少量含む黒褐色土、3層はVI層に起因する土をブロック状に少量含む暗灰黄色土である。遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）、須恵系土器杯・高台付杯が出土している。

SD 1265 溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。SB1301及びSD1264と重複しており、SB1301より新しく、SD1264より古い。規模は、長さ86cm以上、深さ29cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

SD 1266 溝跡

調査区北半部のV層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1267と重複しており、これより古い。規模は、長さ59cm以上、深さ21cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。埋土は暗オリーブ褐色土で砂をブロック状に含む。遺物は出土していない。

SD 1267 溝跡

調査区北半部のIII層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1266と重複しておりこれより新しい。規模は、長さ21m以上、上幅39～61cm、下幅18～23cm、深さ55cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急

（註）前述したようにI～III層とIV層の一部は既存の水路により壊されており、検出面が不明なものがある。これらについては断面観察などから明確なものだけを記した。

に立ち上がっている。埋土は4層に区分でき、1層は黒色土で褐色土をブロック状に少量含んでいる。2層は灰黄色土で炭化物がレンズ状に堆積している。3層は黒褐色粘質土で炭化物の粒を含む。4層は黒褐色粘質土で砂をブロック状に少量含んでいる。遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、瓦が出土している。

SD 1268 溝跡

調査区南半部で発見した東西方向の溝跡である。5時期の変遷（A→E期）が確認できた。

A期：VI層上面でSD1268aを長さ57cm検出した。深さ23cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に沿う。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。埋土は灰色土でVI層に起因する土をブロック状に含む。遺物は出土していない。

B期：VI層上面でSD1268bを長さ1.9m検出した。規模は上幅1.7~1.8m、下幅1.2m、深さ27~39cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に沿う。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に区分でき、1層は灰色粘土で炭化物を少量含む。2層は灰色粘土でVI層に起因する土をブロック状に少量含む。3層は暗灰黄色粘土である。遺物は土師器杯（B I類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕・高台付杯が出土している。

C期：V層上面でSD1268cを長さ2m検出した。規模は上幅1.9m以上、下幅1.4m、深さ39cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に沿う。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層は暗灰黄色粘土で、2層は灰色粘土でVI層に起因する土をブロック状に含む。遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕が出土している。

D期：IV層上面でSD1268dを長さ1.9m検出した。規模は下幅36cm、深さ28~42cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に沿う。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に区分でき、1・2層は暗灰黄色土、3層は黒褐色土である。遺物は土師器甕（B類）、須恵器杯（V類）が出土している。

E期：IV層上面でSD1268eを長さ1.94m検出した。調査区の東側でSD1269と接続している。規模は上幅1.3~1.5m、下幅30~42cm、深さ38~44cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に沿う。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は5層に区分でき、1層は灰白色火山灰の自然堆積層、2層は褐灰色粘質土でVI層に起因する土をブロック状に少量含む。3層は黒色土でIV層に起因する土をブロック状に少量含む。4層は灰オリーブ色砂で、5層は黒色粘土である。遺物は土師器杯（B I・B II・B V類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、平瓦（II B-a）、丸瓦（II類）、砥石が出土している。

SD 1269 溝跡

調査区南半部のIV層上面で5.6m検出した北東から南西方向に延びる溝跡である。調査区の東側でSD1268eと接続している。規模は上幅56~117cm、下幅43~89cm、深さ29cmである。方向は北で約66度東に偏する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、SD1268eの2・3層と同一である。遺物は土師器杯（B V類）・甕（B類）・高台付杯、須恵器甕、須恵系土器杯・高台付杯、丸瓦（II B類）、砥石が出土している。

SD 1270 溝跡

調査区南半部のII層上面で検出した東西方向の溝跡である。SK1283と重複しており、これより古い。規模は、長さ75cm以上、上幅1.4m、下幅25~49cm、深さ50cmである。方向はほぼ東西方向の座標軸に

沿う。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に区分でき、1層は黒褐色粘質土、2層は黒色粘土、3層はVI層に起因する土をブロック状に少量含む黒色粘質土、4層はVI層に起因する土をブロック状に含む黒色粘質土である。遺物は土師器杯（BII類）・甕・須恵器杯・甕・須恵系土器杯が出土している。

SD 1271溝跡

調査区南半部のVI層上面で検出した南北方向の溝跡である。南側で東に向かって屈曲している。SD 1272と重複しておりこれより古い。規模は、長さ25.4m以上、下幅30～43cm、深さ50～74cmである。方向は北で東に約5度偏している。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。埋土は5層に区分できる。1層はオリーブ黒色土で炭化物を粒状に少量含む。2層は黄灰色粘質土で炭化物を少量含む。3層は灰色粘質土、4層は灰オリーブ砂質土、5層は灰色砂である。さらに2～5層はVI層に起因する土をブロック状に含んでおり、人為的な埋土と考えられる。遺物は土師器杯（B I・B II・B II c・B V類）・甕（B類）・高台付杯・須恵器杯（III・V類）・甕・高台付杯・蓋・瓶、丸瓦（II類）が出土している。

SD 1272溝跡

調査区南半部のVI層上面で検出した東西方向の溝跡である。SD 1271と重複しておりこれより新しい。規模は、長さ2m以上、上幅57～80cm、下幅31～57cm、深さ28cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分できる。1・2層は褐灰砂質土で、VI層に起因する土を粒状に少量含んでおり、2層がやや暗い色調を呈している。遺物は土師器杯（B I・B V類）・甕（B類）、須恵器杯・甕が出土している。

SD 1274・1284溝跡

調査区南半部のVI層上面で発見した溝跡である。搅乱溝で壊されているものの、これらは同一の溝跡と考えられる。規模は長さ7.2m以上、上幅36cm、下幅21cmである。方向は北で東に約10度偏している。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は、土師器甕（B類）が出土している。

SD 1275溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ2m以上、上幅35m、下幅10m、深さ15cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1276溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ63cm以上、上幅42m、下幅20m、深さ8cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1277溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。SD 1278と重複しており、これより新しい。規模は、長さ22m以上、上幅40cm、下幅19cm、深さ10cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1278溝跡

調査区北半部で発見した溝跡である。調査区東側で東西方向から南北方向に屈曲する。SD 1277と重複しており、これより古い。規模については、長さは東西方向で2m以上、南北方向で90cm、上幅24cm、下幅10cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1279溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ2m、上幅36cm、下幅14cm、深さ16cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1280溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ88cm以上、上幅26cm、下幅13cm、深さ8cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1281溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ92cm以上、上幅26cm、下幅9cm、深さ10cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SD 1282溝跡

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ36cm以上、上幅31cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土していない。

SK 1283土壙

調査区南半部のII層上面で発見した土壙である。SD 1270と重複しておりこれより新しい。調査区東側に延びているため、全体の平面形は不明である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。深さは85cmである。埋土は3層に区分できる。1層は灰オリーブ色砂をブロック状にわずかに含む黒色砂質土、2層はVI層に起因する土をブロック状に含む黒色砂質土、3層は均質な黒色砂質土である。遺物は土師器杯(BV類)・甕(B類)・高台付杯、須恵器甕、須恵系土器杯・高台付杯が出土している。

SK 1285土壙

調査区北半部で発見した土壙である。SK 1286と重複しておりこれより新しい。擾乱溝で壊されているが、検出できた形から推測すると東西1.7m、南北13mの不整形を呈していると考えられる。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは15cmである。埋土は2層に区分できる。1層は黒褐色粘土で、2層は黒色土と褐灰色砂が互層に堆積している。遺物は土師器杯(BI・BV類)・甕(B類)・高台付杯、須恵器甕、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦(II B類)が出土している。

SK 1286土壙

調査区北半部で発見した土壙である。SK 1285と重複しておりこれより古い。擾乱溝で壊されているが、検出できた形から推測すると平面形はほぼ長方形を呈すると考えられる。長軸は北で東に約16度偏しており、長軸4m、短軸1.5m、深さ44cmである。埋土は4層に区分できる。1層はVI層に起因する土をブロック状に含むオリーブ黒色粘土、2層は炭化物の粒を微量に含むオリーブ黒色粘土、3層はVI層に起因する土をブロック状に含む黒褐色粘土、4層は暗褐色粘土である。遺物は、土師器杯(BI・BII・BV類)・甕(B類)、須恵器杯が出土している。このうち、第4図10の土師器杯(BII類)は、当地域における一般的な土師器とは異なり、内面にヘラミガキや黒色処理がなされず、暗文が施されているものである。

SK 1287土壙

調査区南半部で発見した土壙である。SD 1271と重複しておりこれより新しい。平面形はほぼ円形で、南北55cm、東西45cm、深さ7cmである。遺物は、土師器杯(B類)・甕(B類)、須恵器杯(V類)が出土している。

SK 1288 土壙

調査区南半部のVI層上面で発見した土壙である。調査区西側に一部延びているが、平面形は不整形と考えられる。規模は南北19m、東西82cm、深さ7cmである。遺物は出土していない。

SK 1289 土壙

調査区南半部のVI層上面で発見した土壙である。平面形はほぼ円形である。規模は直径68cm、深さ21cmである。遺物は出土していない。

SK 1290 土壙

調査区南半部で発見した土壙である。擾乱溝で西側を壊されているが、不整形と考えられる。規模は南北1.6m、深さ10cmである。遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査で発見した遺構の年代について若干の考察を行う。

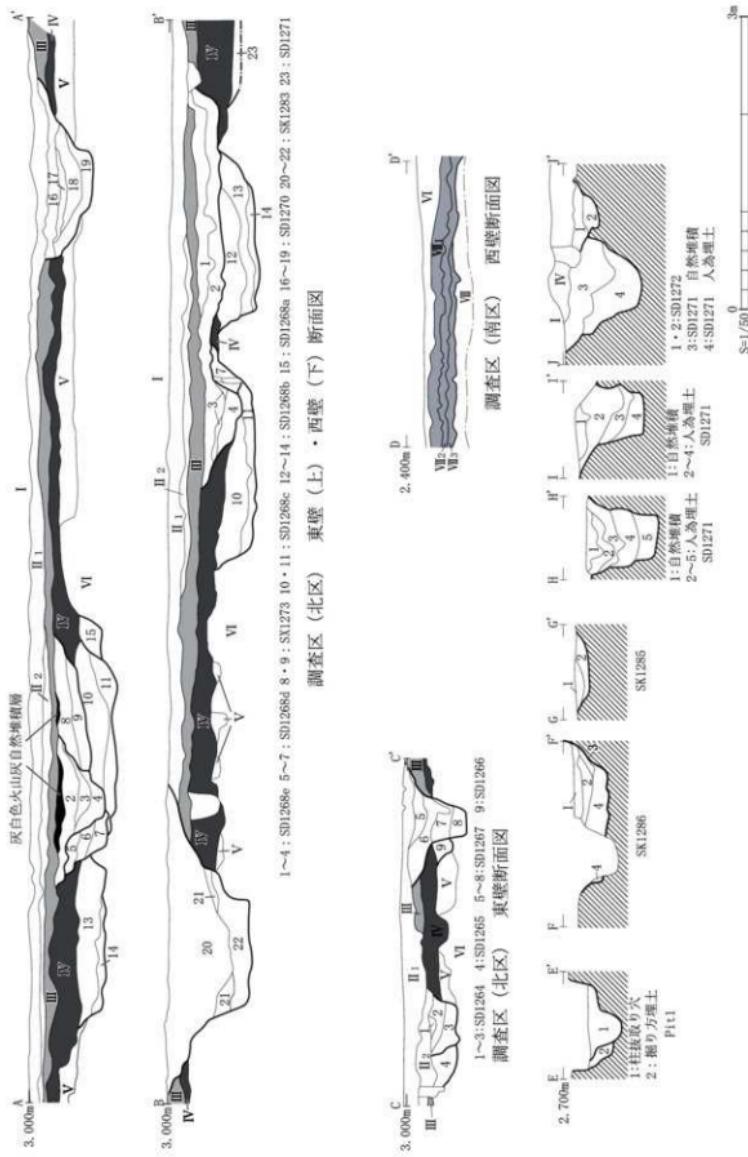
調査区の南側で発見したSD1268は5時期の変遷(A→E期)を確認できた。SD1268eは、灰白色火山灰に覆われていることから10世紀前葉頃には廃絶していたと考えられる。また、SD1268b~dからは出土した遺物が少なく、また器形がわかるものもないが、出土した土師器は全てB類で、A類は出土していない。このことから、その上限は8世紀後葉と考えられる。したがって、B~E期は8世紀後葉~10世紀前葉と考えられる。SD1268aからは遺物が出土しなかったため、その年代は不明である。

SD1271から出土した土師器杯はすべてB類であり、このうち器形がわかるものとしては、土師器杯(BII類)(第4図5)があり、これの底径/口径比は0.47、器高/口径比は0.43である。また、土師器杯のB I類が2点、B IIc類が1点、BV類が1点、須恵器杯はIII類が3点、V類が2点出土しており、いずれも回転糸切り無調整のもの占める割合が半数以下となっている。土師器腹は摩滅したものを除く81点全てがB類であり、このうち体部に叩き調整が確認できるものが2点ある。ただし、この叩き調整を残すものの占める割合が極めて少なく、いずれも破片であることから、これらは混入した可能性がある。これとおよそ同様な様相を示すのは、多賀城跡SE2101B井戸跡第III層出土土器群と同SK2167土壙出土土器群に認められ、前者は天長9(832)年以降でもさほど隔たらない9世紀前半代、後者は9世紀中葉頃に位置づけられている。SD1271溝跡から出土した遺物は、ほとんどが破片であり、杯の点数も多くないなど資料的な制約があるものの、およそこれらの年代幅に収まると考えられることから、9世紀前半から中葉頃としておきたい。

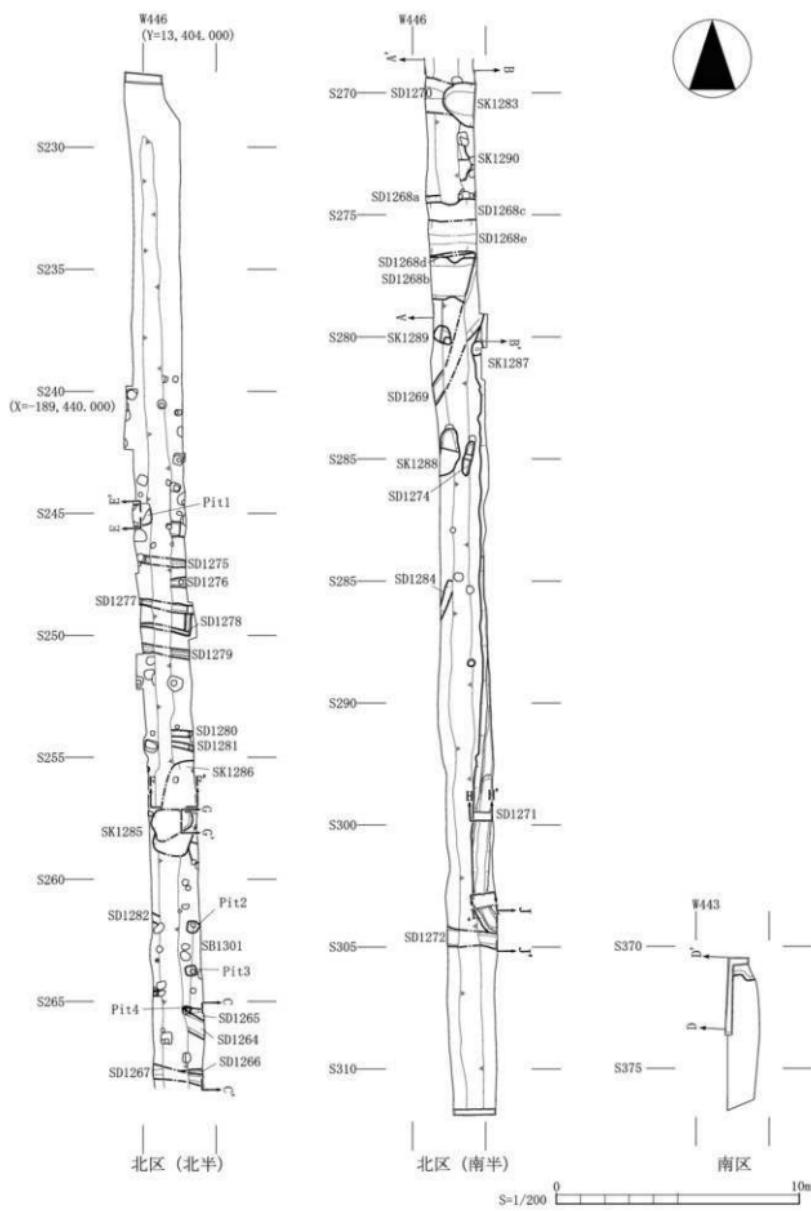
SB1301掘立柱建物跡、SD1264・1267・1270溝跡、SK1283・1285土壙は、灰白色火山灰との関係や、須恵系土器が出土していることから、10世紀前葉以降と考えられる。

【参考文献】

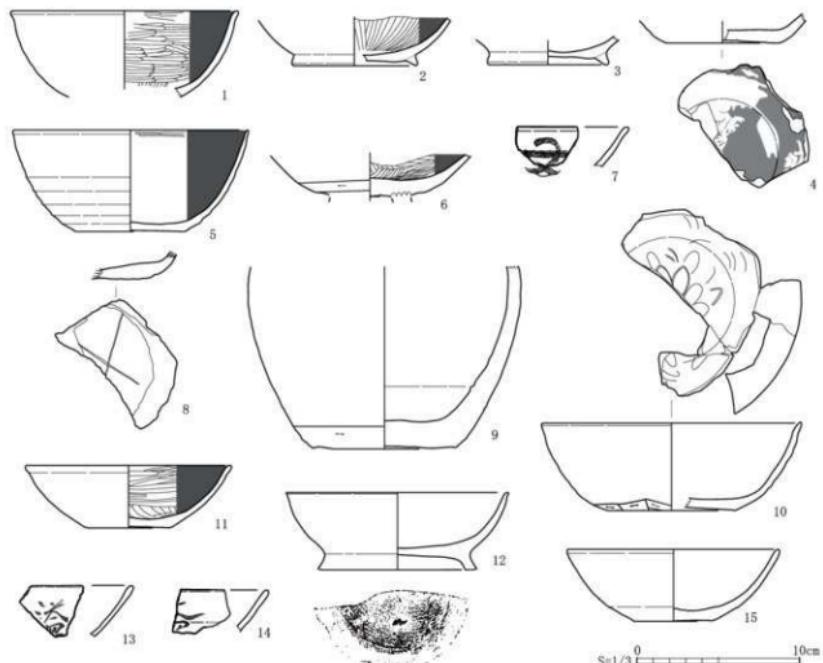
- (1) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992
- (2) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993



第2図 断面図



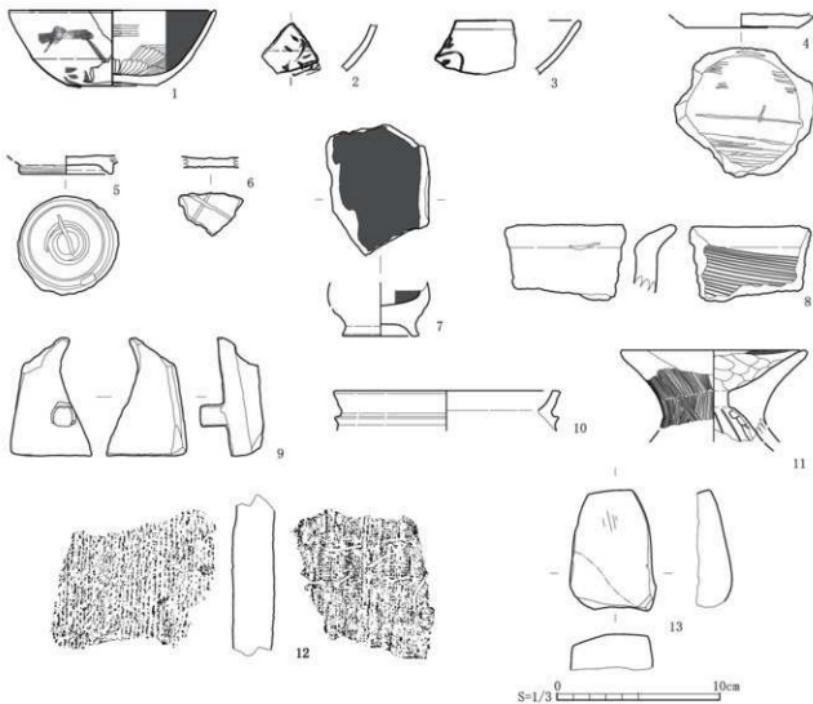
第3図 調査区全体図



単位:cm

種類	遺構・層位	特徴		口径 底径 高さ	底径 高さ	写真 図版	登録 番号	備考
		外面	内面					
1 土師器・杯	SD1269-1層	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	14 7/24	-	-	R23	
2 土師器・高台付杯	SD1269-1層	ロクロナデ、底部回転条切り	ヘラミガキ 黒色処理	- 7.6 5/24	-	-	R38	
3 須恵器・土器・高台付杯	SD1269-1層	ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ	- 7.2 14/24	-	-	R47	
4 須恵器・杯	SD1268d-1層	ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ	- 6.8 10/24	-	-	R44	V類外側にスヌ付着
5 土師器・杯	SD1271-1層	ロクロナデ、底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	14.6 7/24	6.8	6.25	R24	B II 類
6 土師器・高台付杯	SD1271-1層	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	-	-	-	R36	
7 須恵器・杯	SD1271-1層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	R6	体部外側に墨書「口」
8 須恵器・杯	SD1271-1層	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	-	(8)	-	R8	Ⅲ類底部ヘラガキ「X」
9 須恵器・瓶	SD1271-1層	ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底部:回転条切り	ロクロナデ	- 8.8 8/24	-	-	R35	
10 土師器・杯	SK1284-1層	ロクロナデ・手持ヘラケズリ 底部:手持ヘラケズリ	ロクロナデ 漆付着	16 8/24	7.6 15/24	5.4	R22	B II 類 内面に暗文
11 土師器・杯	SK1284-1層	ロクロナデ、底部回転条切り	ヘラミガキ 黒色処理	11/24	5.4	3.85	R2	B V 類
12 須恵器・高台付杯	SK1290-1層	ロクロナデ、底部回転条切り	ロクロナデ	(13.8) 3/24	(9.8) 11/24	4.75	R27	
13 土師器・杯	SK1286-1層	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	-	-	-	R28	体部外側に墨書「底」
14 土師器・杯	P-1・柱抜取穴	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	-	-	-	R17	体部外側に墨書「能」
15 須恵器・杯	P-2・柱抜取穴	ロクロナデ、底部:回転条切り	ロクロナデ	(13.2) 8/24	4.8 24/24	4.45	R1	V類

第4図 溝跡・土壤・柱穴出土遺物



種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外側	内側						
1 土師器・杯	攢丸	ロクロナデ、底部斜軸角 切り	ヘラミガキ 黒色処理	(12.5)	5.5	4.65		R5	B V類、体部外面に墨書き「口」
2 土師器・杯	攢丸	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	-	-	-	3-3	R7	体部外面に墨書き「溢」
3 土師器・杯	攢丸	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	-	-	-	3-5	R10	体部外面に墨書き「口」
4 須恵器・杯	I層	ロクロナデ、底部ヘラ切 り	ロクロナデ	-	7	-		R21	直頸
5 土師器・高台 付杯	I層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	5.5	-		R9	
6 須恵器・杯	I層	底部：ヘラ切り	ロクロナデ	-	-	-		R16	直頸、底部外面にヘラガキ「×」
7 土師器・耳皿	攢丸	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	-	4.65 20/24	-		R30	全体に黒色付着物
8 土師器・瓶	I層		ハケ目	-	-	-		R4	
9 風字鏡	攢丸			-	-	-		R31	
10 円面鏡	攢丸	ロクロナデ		-	14 5/24	-		R29	
11 土師器・高台	I層	ハケ目	指頭圧痕、ハケ 目、ヘラナデ	(11.6)	-	-		R3	古墳時代
12 平瓦	I層			-	-	-		R25	ヘラガキ「伴」
13 硯石	SD1269・1層	長さ:7.15 厚さ:2.05						R37	

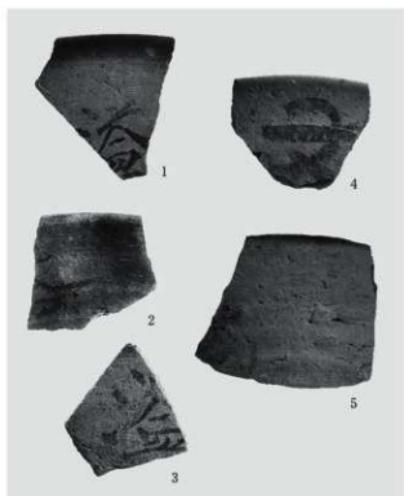
第5図 SD 1269・遺構外出土遺物



1 SD1268・1270溝跡、SK1283土壤（北東より）



2 SD1271溝跡（北より）



3 墨書き土器 (1 : 第4図12 R28 2 : 第4図14 R17
3 : 第5図2 R7 4 : 第4図7 R6
5 : 第5図3 R10)

附章 山王遺跡第59次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れて分解したあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。とくに、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能であることから（藤原・杉山、1984）、各地の水田遺跡の調査で積極的に取り入れられている。

山王遺跡第59次調査では、南区において古墳時代の水田耕作層とみられる黒色粘土層が確認された。そこで、当該層における稻作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行うことになった。

2. 試料

調査対象は、北区と南区の2地点である。分析試料は、北区では上位よりVI層、VII層、VIII層より採取された3点、南区では上位よりVI層、VII層、VIII層、VII層より採取された5点の計8点である。なお、試料は遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に直徑約 $40 \mu\text{m}$ のガラスピースを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ($550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ($300\text{W} \cdot 42\text{KHz} \cdot 10$ 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20 \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顯微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10 - 5 \text{ g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チマザサ節・チマキザサ節）は0.75である（杉山、2000）。

4. 結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケア科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

（1）北区

イネはVII層とVIII層で検出されている。プラント・オパール密度はいずれも低い値である。ヨシ属はVII層とVIII層で検出されている。VII層では比較的高い密度である。スキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型はすべての試料で検出されている。このうち、スキ属型はVII層で、クマザサ属型はすべての層で高い密度である。また、ネザサ節型はVII層で比較的高い密度である。

（2）南区

イネはVII層、VIII層、VIII層で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属、スキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型はいずれもVII層～VIII層で検出されている。このうち、ヨシ属はVII層とVIII層で、スキ属型はVII層、クマザサ属型

はすべての層で高い密度である。

5. 考察

古墳時代の水田耕作層の可能性が考えられたVII~3層では、北区、南区ともにイネのプラント・オパールが検出されている。しかし、プラント・オパール密度はいずれも1,200個/gといずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを下回っている。したがって、これらの層が水田耕作土であった可能性を積極的に肯定することはできない。稲作は周辺で行われており、そこからプラント・オパールが混入したとみるべきであろう。仮に調査地においてこれらの層で稲作が営まれていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことの原因として次のようなことが考えられる。すなわち、1) 稲作が行われていた期間が非常に短かった、2) 稲叢の大部分が耕作地の外に持ち出されていた、3) 稲の生産性が低かった、4) 土層の堆積速度が非常に速かった、などである。

おもな分類群の推定生産量をみると、ヨシ属が南区のVII~2層で非常に高い密度であり、同VII層および北区のVII~2層でも高密度であり優勢となっている。したがって、これらの層の堆積時は、調査地周辺は湿地かそれに近い環境であったと推定される。なお、各層ともクマザサ属が高い密度で検出されており、北区のVII~1層や南区のVII~2層ではススキ属も高い密度である。こうしたことから、VII層、VII~1~3層、の堆積時は調査地周辺の乾いたところにクマザサ属やススキ属などが生育していたと推定される。

表1 多賀城市山王遺跡第59次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度(単位:×100個/g)

分類群(和名・学名)	層位	北区			南区			
		VII	VIII	VII~2	VII	VIII	VII~2	VIII~3
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	<i>Oryza sativa</i>		12	12	6	12	12	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6		24	12	24	48	12
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type	24	42	6	12	12	42	18
タケ亞科	Bambusoideae (Bamboo)							
ネズサ属	<i>Pleiothlasius</i> sect. <i>Nezasa</i> type	42	18	12	21	24	30	18
クマザサ属	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	72	114	60	69	60	54	60
その他	Others	12	6		9	6	6	
未分類等	Unknown	96	108	108	90	60	96	66
プラント・オパール総数		252	300	222	219	198	288	174
おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m ² ·cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.35	0.35	0.18	0.35	0.35		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38		1.51	0.76	1.52	3.02	0.76
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type	0.30	0.52	0.07	0.15	0.15	0.52	0.22
ネズサ属	<i>Pleiothlasius</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.20	0.09	0.06	0.10	0.12	0.14	0.09
クマザサ属	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.51	0.86	0.45	0.52	0.45	0.40	0.45

6. まとめ

山王遺跡第59次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、古墳時代の水田耕作土の可能性が想定されていたVII~3層について、イネのプラント・オパールが検出されたものの低密度であることから、調査地で水田稲作が営まれていた可能性を積極的に支持することはできなかった。なお、VII~2層と南区のVII~1層の堆積時は、調査地周辺は湿地あるいはそれに近い環境であったと推定された。

文献

- 杉山真二(1987)タケ亞科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83。
杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志、杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学、17、p.73-85。

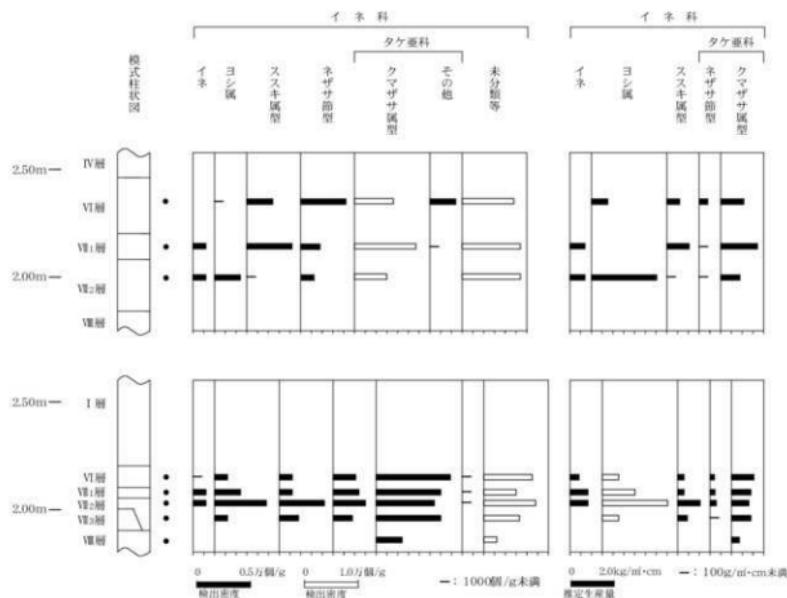
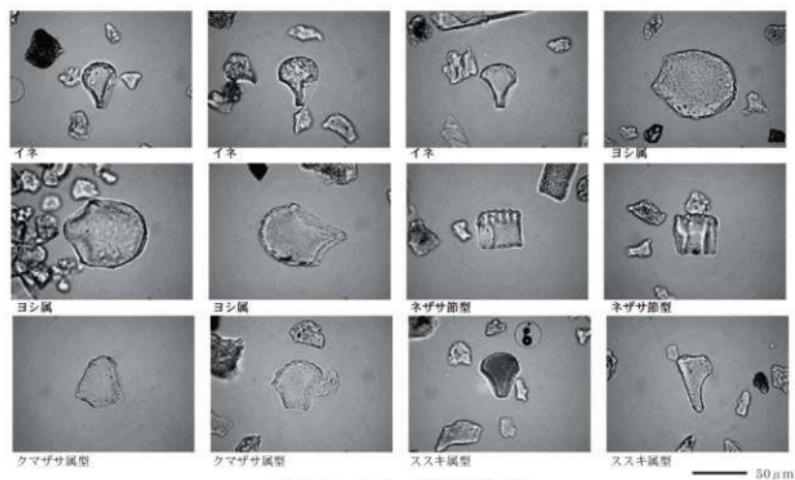


図1 プラント・オパール分析結果(上段:北区、下段:南区)



プラント・オパールの顕微鏡写真

V. 市川橋遺跡第53次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年4月に地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。建築工事では、住宅の基礎工法に直径20cm、長さ3~3.3mの鋼管杭を30本打ち込むRC杭工法を施していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施されることが決定した。その後、8月19日に地権者より発掘調査についての依頼を受け第53次調査の実施に至ったものである。調査は8月29日より開始し、重機を使用してI~II層(盛土~現代以前の水田土)を全て除去した。掘削土は、調査対象地内の安全と調査面積確保のため、全て城外へ搬出した。翌日、作業員を勤員し、最初に土層観察と排水溝を兼ねた側溝を掘る。これらの作業と並行して平面図作成のための基準点の設定も行う。検出作業の結果、溝と小溝を検出し、重複関係の有無を確認後、これらの埋土を除去する。8日調査区の全景写真撮影後、遺構の平面図・土層図を作成する。12日土層注記の後、埋め戻し作業を行って、現地調査を終了した。

2. 調査成果

(1) 層序

調査区の層序は、おおよそ以下の11層に大別できる。

I₁層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは最大約2m。

I₂層：現代の水田耕作土で、厚さは最大約45cm。

II層：現代以前の水田耕作土で、厚さは8~25cm。

III層：調査区の全域に堆積する黒褐色粘土で、厚さは2~16cm。

IV層：調査区のほぼ全域に堆積する灰黃褐色粘土で、灰白色火山灰粒子を含む。厚さは11~26cm。

V層：黒褐色粘土で厚さは最大12cm。

VI層：黄褐色粘土で、上面が遺構検出面である。

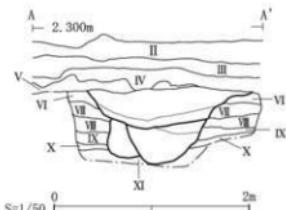
VII層：暗灰黄色粘土

VIII層：オリーブ黒色粘質土

IX層：暗灰黄色粘質土



第1図 調査区位置図



第2図 SD 3244 ほか断面図

(2) 発見遺構

今回の調査では溝跡1条、小溝跡2条を発見した。これらは全てVI層で検出した。遺物は出土していない。
SD3244溝跡

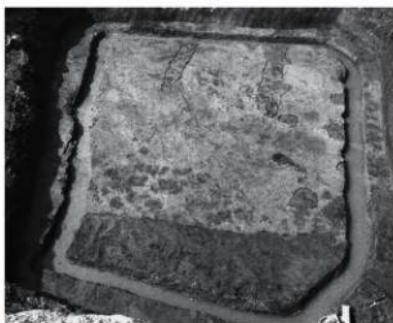
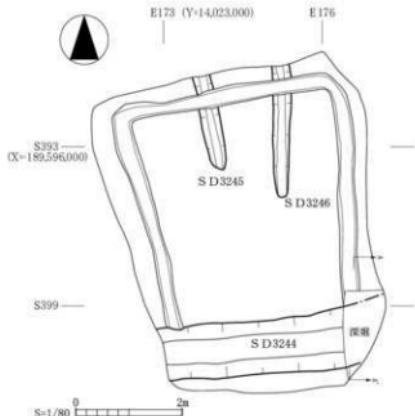
調査区南半部の東・西壁間で発見した東西溝跡である。確認できた長さは約4mで両端は調査区外へ延びる。東壁で土壌状の落ち込みと重複し、これより新しいが詳細は不明である。方向は東で約3度北に偏している。規模は上幅106m、深さは23cmである。壁の北側は緩やかに立ち上がり、南側は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。埋土は2層に区分される。上層は砂を含んだ黒褐色粘土、下層は黄褐色粘質土を斑状に含む緑灰色砂である。

SD3245・3246小溝跡

調査区北半部で発見した南北方向の小溝である。確認できた長さは約18~25mで、いずれも北側は調査区外へ延びる。方向はほぼ発掘基準線に沿っている。規模は上幅22~36cm、深さは8cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は砂を多く含んだ黒褐色粘土である。

3.まとめ

今回の調査では、溝跡1条と小溝跡2条を発見した。年代は、出土遺物がないため不明であるが、灰白色火山灰が埋土には全く含まれず、それらを直接覆っているV層のさらに上層にあるIV層に灰白色火山灰の小粒が二次堆積していることから、およそ10世紀前葉以前と考えておきたい。



第3図 調査区平面図

調査区全景（南より）

VI. 高崎遺跡第52次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本件は、下水道污水管布設工事に係る本発掘調査である。平成17年8月23日付けで多賀城市より公共下水道污水管布設工事と埋蔵文化財とのかかわりについて協議の書類が提出された。この工事は全長282.2mに及ぶものであったが、最大掘削幅75cm、最深掘削高1,892mと狹隘であることから工事立会で対処することになった。10月21日、下水道課・施工業者と工事の日程と埋蔵文化財発見時における対応の仕方について協議を行い、遺構・遺物が発見された場合には工事を一時中断し、確認調査を実施することで承諾を得た。

工事は東側から開始され、11月4日に最初の立会を実施した。布設工事の対象路線は、その多くが新規掘削であることから、表土除去の段階から立会を行い、11月15・16日にはM14～M15間で竪穴住居跡1軒、11月29・30日にはM13～M14間で土壙1基、1月17・18日にはM19～M20間で竪穴住居跡1軒、溝跡1条、土壙1基、1月20・23日にはM18～M19間で掘立柱建物1棟を発見し、埋土の除去、平面図・断面図の作成、写真撮影など行うことができた。また、12月23日にはM9～M11間で丘陵部と低湿地の境界を確認し、その広がりについて手がかりを得た。本立会は、断続的に翌年の2月20日まで続いた。

2. 調査成果

(1) 層序

M14～M15区

I層：表土（現在の道路に伴う碎石層）

II層：古代の遺構が削平された後に堆積した

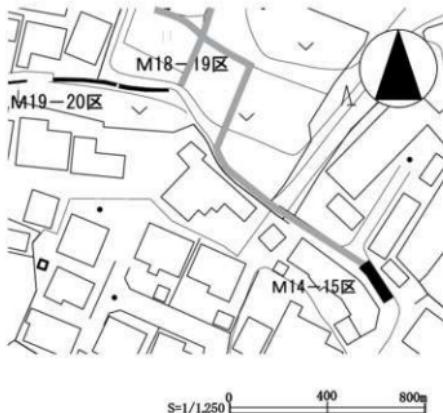
暗灰黄色砂質土。グライ化し、粘性を帯びた部分もある。

M19～M20区

I₁層：表土（現在の道路に伴う碎石層）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区分布図

I2層：I1層以前の表土

II層：古代の遺構が削平された後に堆積したにぶい黄褐色砂質土。マンガン粒を多量に含んでいる。

M18 - M19区

現代の道路に伴う盛り土の下は直ちに地山である基盤層となっている。

M9 - M10区

I層：表土

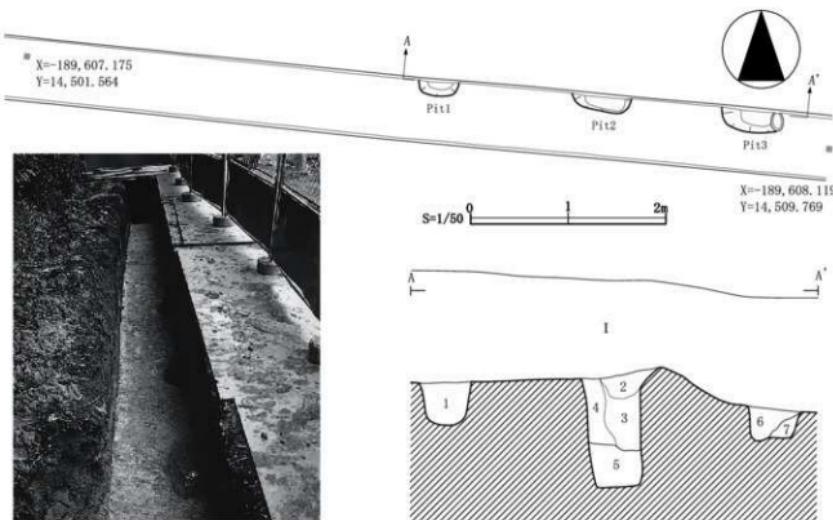
II層：III層に近似した黄灰色土。I層の攪乱が著しい。

III層：湿地に堆積した黄灰色土。現地表下約1.3m下に灰白色火山灰層が部分的に自然堆積。

(2) 発見遺構と遺物

SB1686 摺立柱建物跡

M18 - M19区の地山上で発見した、東西方向に並ぶ3基の柱穴から推定した摺立柱建物跡である。いずれの柱穴もおおよそ北半分は調査区外にある。各柱穴の南辺はおおよそ揃っているため、それらから方向を推定すると、東で約7度南に偏している。柱間は、柱穴の中央に柱位置を推定すると、西から約17m、約15m、2間分で約32mである。各柱穴の規模は、Pit1が東西50cm、検出面からの深さ28cm、Pit2が東西57cm、深さ74cm、Pit3が東西50cm、深さ18cmである。十分な精査を行うことはできなかつたが、Pit1は壁の立ち上がりが緩やかであり、埋土である黄褐色土はにぶい黄褐色土の大きなブロックを含むことから、抜き取り穴の可能性がある。Pit2・3についても、上層の締まりのないにぶい黄褐色や褐色土(2~4・6)は抜き取り穴、堅く締まった下層の黄褐色土(5・7)は掘り方埋土と考えられる。遺物はPit2の抜き取り穴から須恵器長頸瓶の破片が出土している。



SB1686 建物跡（東より）

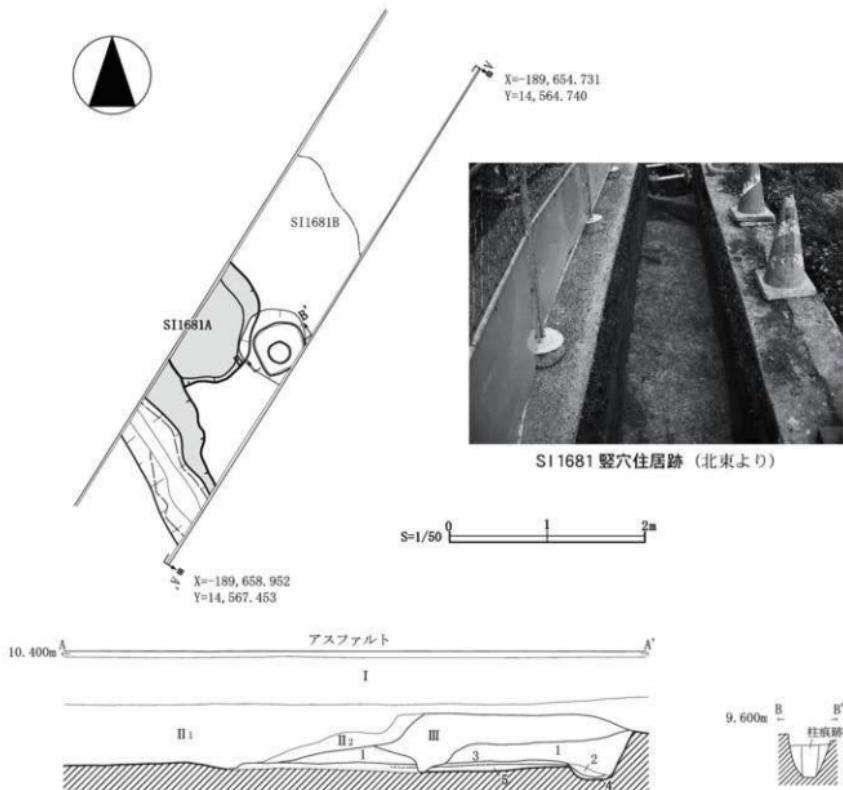
第3図 SB1689 平面図・断面図

SI 1681 穫穴住居跡

M14 - M15区の地山上で発見した竪穴住居跡である。II層に覆われており、同層堆積前に著しく削平を受けているため、検出できたのは西辺の一部である。およそ同位置で2時期の重複を確認した(A→B期)。方向は南で約30度東に偏している。

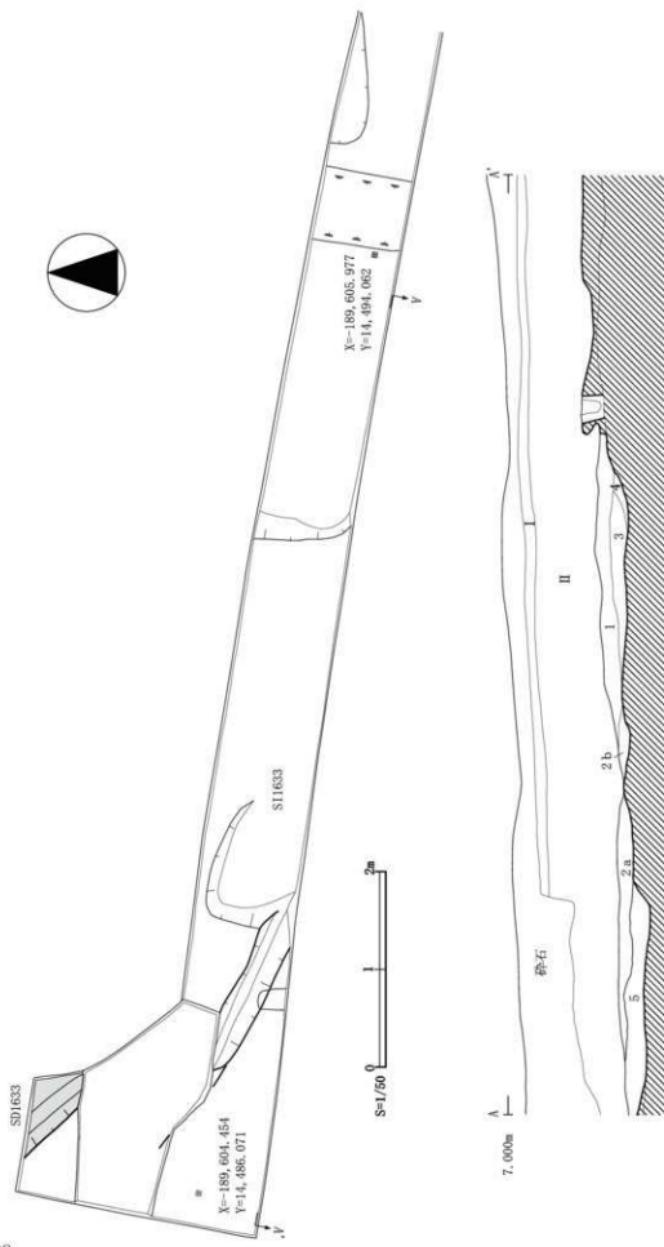
SI 1681A: 挖り下げた地山に2~4cmの厚さで貼床を施したもので、その床面上で周溝とその東壁に接して浅いくぼみを検出した。周溝は上幅53~66cm、下幅33~40cm、床面からの深さは約13cmである。浅いくぼみと接する部分では上幅が広くなっている。浅いくぼみは平面形がおよそ円形を呈しており、直径1.2m以上、深さ5~9cmである。遺物は堆積土2層から土師器甕が出土している。特徴的な部分はほとんどないが、非口クロ調整の口縁部破片が1点ある。

SI 1681B: A期の床面に2~3cmの厚さで貼床を施して床面を構築したもので、その上面で周溝と柱穴を



第4図 SI 1681 平面図・断面図

第5図 SI1683 平面図・断面図



検出した。床面からの壁高は24cmであり、周溝は上幅38~44cm、下幅10~18cm、床面からの深さは約14cmである。貼床は周溝東壁から約2.5mの範囲まで検出した。周溝埋土は地山小ブロックを含む褐色砂質土である。柱穴は周溝の東壁から約1.1m東側で発見した。平面形はおおよそ方形を呈し、規模は一辺約40cm、深さは44cmである。その中央で柱の当たり痕跡を残す抜き取り穴を確認した。その規模は直径17cmであり、埋土には地山小ブロックが多く混入している。堆積土はにぶい黄褐色砂質土であり、床面を直接覆っている。地山小ブロックを多量に含んでいることから、本住居跡は人為的に埋め戻された可能性がある。

SI 1683 竪穴住居跡

M19~M20区の地山上で発見した竪穴住居跡である。現代の埋設物によって大きく破壊されており、検出できたのは南辺の一部である。SD1684と重複しており、それより新しい。方向は東で約25度南に偏している。床面は、掘り下げた地山に貼床を施して構築しており、その分布は調査区西壁から2.5mの範囲まで確認したが、調査区南壁までは及んでいない。周溝は1.5m検出しており、上幅25~30cm、下幅約7cm、床面からの深さは約7cmである。平面では確認できなかったが、南壁断面に見える5層は灰黄褐色、6層はにぶい黄褐色でいずれも自然堆積の砂層であることから、周溝の一部と見られる。周溝の北壁に接して浅いくぼみを検出した。堆積土は南壁断面の3・4a・4b層と見られ、床面である地山面を直接覆っている。3層は黄褐色土、4a・4b層はにぶい黄褐色土であり、灰黄褐色の染みが特徴的である。遺物は炭化物層から土師器甕、貼床から須恵器杯が少量出土している。須恵器杯は底部の小片で、ロクロからの切り離しはヘラ切りである。

SD 1684 溝跡

M19~M20区の地山上で発見した溝跡である。調査区の北西隅において約80cm検出したにすぎない。SI 1683の貼床によって覆われており、それより古い竪穴住居の周溝の可能性もある。上幅42cm以上、下幅13cm、深さは16~18cmである。遺物は出土していない。

SK 1685 土壙

M19~M20区の地山上で発見した落ち込みである。SI 1683の堆積土と見られる4a層によって覆われている。規模は東西20m以上、深さは15cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質土であり、地山小粒や砂を含んでいる。遺物は出土していない。

3.まとめ

- (1) 掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡2軒、溝跡1条、土壙2基を発見した。
- (2) 遺構の年代は、出土した遺物からおおよそ古代と考えられる。

VII. 高崎遺跡第54次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年11月10日に地権者より当該地における擁壁設置工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。その計画では、西側を除く全てに亘る既存の擁壁を撤去した後、西側は新規に、その他はほぼ同位置で擁壁を設置し、その基礎工事に際し幅0.7~1m、深さ43~80cmの掘削を行うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。ただし、掘削面積が狭隘であることから、工事立会として実施することとなつたが、後述するように遺構が発見されたことから本発掘調査を行なうこととなった。

12月7日から工事立会を行つたところ、最も標高の高い北西部で遺構を発見したことから、本発掘調査に移行した。8日に実測図を作成のための測量を行つた後、平面図を作成した。一部遺構の埋土を堀上げ、写真撮影を行い、調査を終了した。

2. 調査成果

(1) 層序

現表土から約20cm下が基盤層である岩盤となっており、この上面が遺構検出面となつてゐる。

(2) 発見した遺構・遺物

SD 1623溝跡

南北方向の調査区のほぼ中央で発見した小規模な溝跡である。調査区の東側に向かって延びており、確認できた長さは68cmである。幅は30~48cmで、方向は東で南に32度偏する。底面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、灰色粘質土で岩盤に起因する石を含んでゐる。遺物は出土していない。

柱穴

7基の柱穴を発見した。Pit 1では柱のあたり痕跡を残す抜取り穴(註)を確認した。平面形は円形や方形を基調としている。規模は、前者は直径21~37cm、後者は一辺34cmである。遺物は、Pit 1から土師器甕(B類)が出土している。

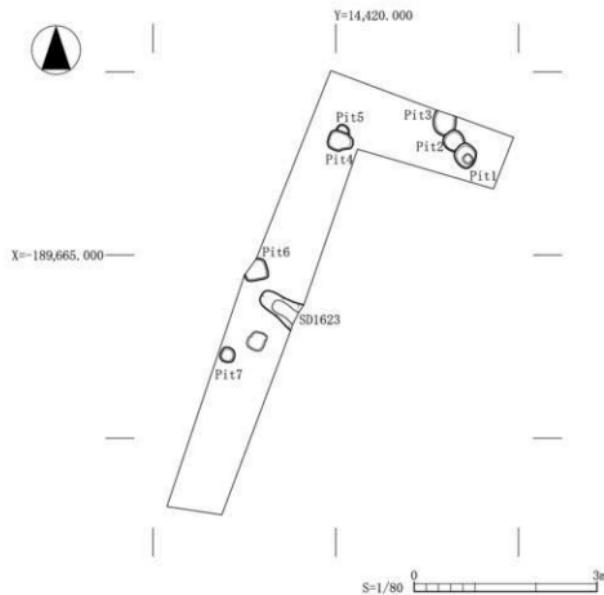
(註)柱のあたり痕跡を残す抜取り穴としたものは、その形状は柱痕跡と類似しているが、埋土に岩盤に起因する石を含んでいることから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考えられる。



第1図 調査区位置図

3.まとめ

今回の調査では、土壙1基、柱穴・Pitを7基発見した。柱穴の年代については、Pit 1から土師器甕(B類)が出土しているが、これらの規模は古代のものに比べて小規模であり、形が不揃いであることが指摘できる。このような特徴は周辺の調査において確認されている中世以降の掘立柱建物跡と類似しており、これら年代は中世もしくはそれ以降の可能性が考えられる。SD 1623溝跡については遺物が出土していないことから不明である。



第2図 遺構平面図

VIII. 小沢原遺跡第8次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年7月15日に地権者より当該地における個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。その計画では、住宅の基礎工事の際に直径60cm、長さ3.25mの地盤改良杭を38本施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された工法で実施することに決定した。その後、平成17年9月15日に地権者より発掘調査の依頼を受け、10月3日から調査を開始した。

調査は10月3日から重機を使用して、表土（I層）の除去を開始し、5日に現地表から約1.7m下でSD36～38溝跡を発見した。6日から、IV層上面での遺構検出作業を開始するとともに、調査区の周囲に層序の断面観察と、排水溝を兼ねたサブトレーンチを設定した。その結果、IV・V層の上面がそれぞれ遺構検出面となっていることがあることが明らかとなった。7日、IV層上面の遺構検出状況の写真撮影を行った後、基準点を設け実測図の作成を行った。12日に調査区南西壁の断面観察の結果、SD38がSD37より新しいことが判明した。13日、IV層上面で発見した遺構を完掘した後、写真撮影を行った。さらにIV層を除去したところ、V層上面でSD39～41溝跡を検出した。この時点で現地表からの深さが25mを超えていたため、これ以上の掘削は危険と判断し、埋土は掘り下げず、V層上面の平面図および南・北壁の土層断面図を作成した。14日には埋め戻しと器材の撤収を行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図

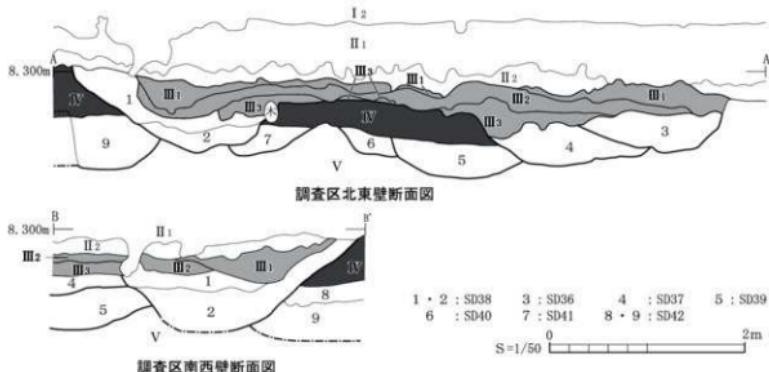
2. 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

- I₁層：現代の盛土で、厚さは約55cm。
- I₂層：現代の耕作土で、厚さは84～138cm。
- II₁層：緑灰色粘土で、厚さは22～60cm。
- II₂層：灰色粘土で、厚さは約14cm。

- III₁層：黒色粘土で、粒状の灰白色火山灰を微量に含む。厚さは6～33cm。
- III₂層：黒褐色砂と砂質土の互層で、植物遺存体を含む。厚さは6～23cm。
- III₃層：灰オリーブ色粘質土で、厚さは12～37cm。
- IV 層：灰オリーブ色粘質土で、厚さは10～40cm。
- V 層：岩盤で、丘陵部の基盤層。



第2図 調査区北東壁・南西壁断面図

(2) 発見した遺構・遺物

SD 36 溝跡

調査区東側のIV層上面で発見した北東から南西方向に延びる溝跡である。SD37と重複しており、それより新しい。規模は長さ1.7m以上、上幅1.1～1.3m、下幅40～80cm、深さ17～38cmである。方向は、北で約35度東に偏している。底面は南側に緩やかに傾斜しており、その比高は5cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、黒褐色砂質土と粗砂との互層である。遺物は出土していない。

SD 37 溝跡

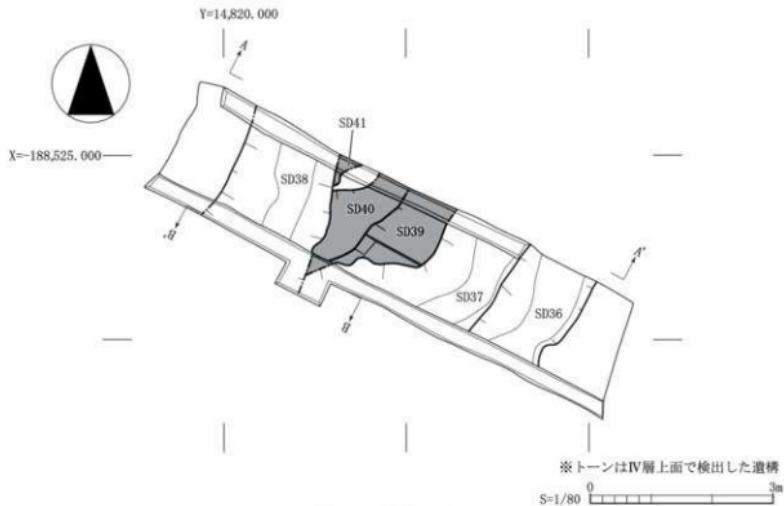
調査区中央のIV層上面で発見した北東から南西方向に延びる溝跡である。南西側で西に張り出す様を呈しており、ここから西に屈曲する可能性がある。SD 36・38と重複しており、それより古い。規模は長さ22m以上、上幅13m以上、下幅40～60cm、深さ44～56cmである。方向は北で約33度東に偏している。底面は南側に緩やかに傾斜しており、その比高は7cmである。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は下層にブロック状の粘土と植物遺体を含む暗オリーブ褐色砂である。遺物は出土していない。

SD 38 漢跡

調査区西側のIV層上面で発見した北東から南西方向に延びる溝跡である。SD37と重複しており、それよりも新しい。規模は長さ1.3m以上、上幅1.6～1.7m、下幅40～60cm、深さ39～86cmである。方向は、南で約20度西に偏している。底面は南側に緩やかに傾斜しており、その比高は13cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層はオリーブ黒色粘土、2層は粘土ブロックを含むオリーブ黒色砂質土である。遺物は出土していない。

SD 39 漢跡

調査区中央のV層上面で発見した北東から南西方向に延びる溝跡である。SD40と重複しており、これより新しい。規模は長さ1.7m以上、上幅1.3m以上、下幅1.1m以上、深さ約34cmである。方向は北で46度東に偏している。埋土は、植物遺体とブロック状の粘土を含む灰色砂である。遺物は出土していない。



第3図 遺構平面図

SD40溝跡

調査区中央のV層上面で発見した溝跡である。埋土は掘り下げなかった。SD39と重複しており、これより古い。調査区北東壁での深さは28cmである。埋土は、オリーブ灰色砂でV層に起因する石をブロック状に含む。遺物は出土していない。

SD41溝跡

調査区中央のV層上面で発見した溝跡である。埋土は掘り下げなかった。調査区北東壁での深さは32cmである。埋土は、灰色砂でV層に起因する石を含んでいる。遺物は出土していない。

SD42溝跡

調査区西側の断面でのみ確認した溝跡である。V層上面から掘り込んでいる。調査区北東壁での深さは57cmである。埋土は2層に区分でき、いずれもオリーブ灰色砂であるが、1層は植物遺体を含んでおり、2層はV層に起因する石を含んでいる。遺物は出土していない。

3.まとめ

ここでは今回の調査で発見した遺構の年代と、周辺の地形及び調査成果を参考にしてその性格について検討を加える。

はじめに、それらの年代については、全ての遺構を覆っているⅢ層に灰白色火山灰が含まれていることから、10世紀前葉以前であることがわかる。しかし、溝跡からは遺物が全く出土しなかったことから、それ以上具体的な年代を知る手がかりを得ることはできなかった。

次に、その性格を考える上で周辺の地形のあり方が参考になる。調査区周辺の現況は、昭和40年代から

行われた大規模な宅地造成によって地形が改変されているが、昭和22年及び昭和36年に撮影された航空写真をみると、本来、当該地周辺は低丘陵と大小の谷があり組んだ複雑な地形を呈しており、その多くは谷地田として利用されていることがわかる。本調査区の南側は東西方向の谷と北東方向に延びる谷との合流点にあたり、本調査区はこのうち北東方向の谷に位置している（註）。そこで、今回発見した溝跡をみるとこのような地形にあわせて、全て北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜している。以上のことから、これらの溝は低い東西方向の谷へ向かって排水する目的で掘削された可能性が考えられる。

【参考文献】

多賀城市教育委員会『小沢原遺跡・高崎遺跡－史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第54集
1999

（註）この東西方向の谷は第1・2次調査の北端においても、北に向かって緩やかに傾斜する自然地形として確認している。
また、これらの谷は、宅地造成が進んだ現在でも周囲よりやや低くなっている、谷の存在はある程度推測できる。



国土地理院撮影の空中写真（昭和36年撮影）

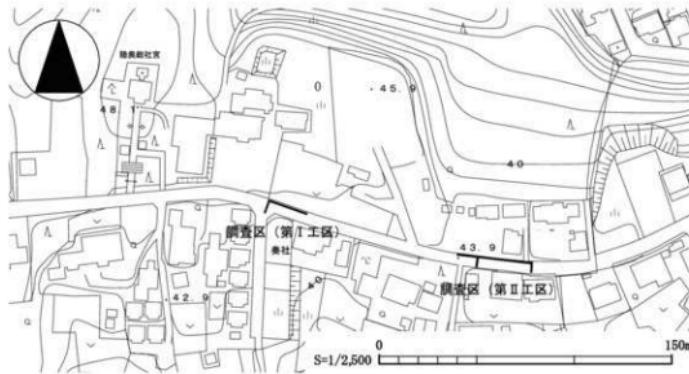


IV層上面全景（西より）

IX. 西沢遺跡第12次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、西沢遺跡における公共下水道污水管布設工事に伴う発掘調査である。平成17年7月26日、当市下水道課より当該区における下水道污水管布設工事と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。この計画は、本市市川字奏社から伊保石にかけて径150mmの塩ビ管を布設するもので、幅85cm、深さ3.0mの敷設溝を全長約60mにわたって掘削する計画であった。対象地区は狭隘であり、市道に面していることから工事立会で対処することとしたが、マンホール設置のための6ヶ所の堅坑掘削時において、現地表面下約50~60cmで地山面を確認したことから、下水道課の協力を得て地山面での遺構検出作業を実施した。調査は工区内掘削の工程に合わせて10月13日~11月17日まで行った。11月15日時期不明の柱穴1基を発見し、写真撮影と平面図を作成し、調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序

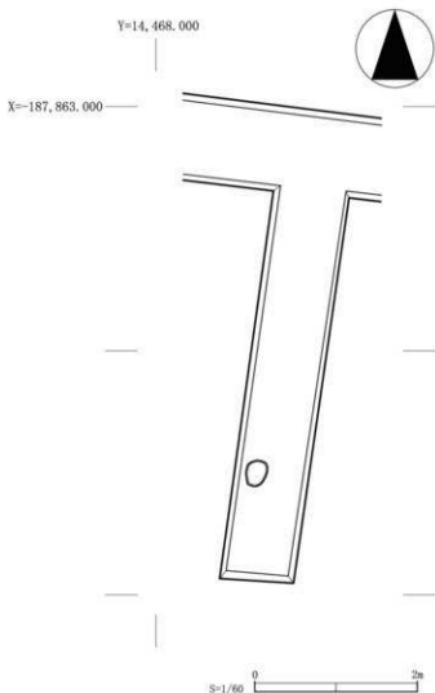
道路面（アスファルト）下には、厚さ30~40cmの碎石が敷き詰められ、その下層には、各工区とも現道に沿った部分に厚さ15cm前後の黒褐色土の堆積が認められる。その下層は、地山である褐色土となっている。

(2) 発見遺構

第II工区の西側に設定した南北敷設溝の南西際で柱穴1基を発見した。平面形は円形である。規模は南北31cm、東西27cmである。遺物は出土していない。

3. まとめ

(1) 今回の調査では、時期不明の柱穴1基を発見した。



第2図 第II工区柱穴平面図



柱穴検出状況（南より）

ふりがな	たがじょうしないのいせき							
書名	多賀城市内の遺跡1							
副書名	平成17年度発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編著者名	千葉孝弥 石川俊英 村松稔							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山王遺跡 (第55次調査)	宮城県 多賀城市山王 二区133-4	042099	18013	38度 17分 39秒	140度 58分 40秒	20050601 ~ 20050627	50m ²	個人住宅 建設
山王遺跡 (第56次調査)	宮城県 多賀城市山王 字千刈田	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 58秒	20050920 ~ 20051012	28m ²	下水道污水 管布設工事
山王遺跡 (第59次調査)	宮城県 多賀城市市川 字多賀前、山 王字山王四区	042099	18013	38度 17分 33秒	140度 59分 11秒	20060110 ~ 20060131	203m ²	農業用排 水路工事
市川橋遺跡 (第53次調査)	宮城県 多賀城市城南 二丁目20	042099	18008	38度 17分 30秒	140度 59分 36秒	20050829 ~ 20050912	29m ²	個人住宅 建設
高崎遺跡 (第52次調査)	宮城県 多賀城市高崎 二丁目地内	042099	18018	38度 17分 29秒	140度 59分 58秒	20051114 ~ 20060220	212m ²	下水道污水 管布設工事
高崎遺跡 (第54次調査)	宮城県 多賀城市高崎 二丁目3-3	042099	18018	38度 17分 27秒	140度 59分 53秒	20051207 ~ 20051208	9m ²	擁壁設置 工事
小沢原遺跡 (第8次調査)	宮城県 多賀城市浮島 二丁目121-4	042099	18043	38度 18分 04秒	141度 00分 09秒	20051003 ~ 20051014	21m ²	個人住宅 建設
西沢遺跡 (第12次調査)	宮城県 多賀城市市川 字奏社・伊保石	042099	18017	38度 18分 27秒	140度 59分 50秒	20051013 ~ 20051117	76m ²	下水道污水 管敷設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡 (第55次調査)	集落・都市	古墳・古代	溝・柱穴・河川	土師器	
山王遺跡 (第56次調査)	集落・都市	古代	柱穴	土師器・須恵器 平瓦	
山王遺跡 (第59次調査)	集落・都市	古墳・古代 中世・近世	竪穴住居 掘立柱建物 溝・土壙・柱穴	土師器・須恵器 須恵系土器 墨書き土器 平瓦・丸瓦	遺構の発見によって、 山王遺跡の範囲がより 南側に広がっている可 能性が高くなった。
市川橋遺跡 (第53次調査)	集落・都市	古代	溝・小溝		
高崎遺跡 (第52次調査)	集落		竪穴住居 掘立柱建物 土壙		
高崎遺跡 (第54次調査)	集落	古代・中世	柱穴・土壙	土師器	
小沢原遺跡 (第8次調査)	散布地	古代	溝	土師器・須恵器 近世陶器	
西沢遺跡 (第12次調査)	集落		柱穴		

多賀城市文化財調査報告書第88集

多賀城市内の遺跡1

—平成17年度発掘調査報告書—

平成19年3月30日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368 - 0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368 - 1141

印刷 株式会社鈴木印刷所

宮城県石巻市蛇田字新谷地前121

電話 (0225) 22 - 4101



古紙配合率100%再生紙を使用しています
印刷には大豆油インキを使用しています

